〔論　文〕

キリスト教保育と日本の幼児教育
―教育方法と教育課程の導入の観点から―

大　土　恵　子
Keiko OTSUCHI

要　旨

欧米で1800年代から幼児教育が始まり、コメニウス、ルソー、ペスタロッチ、フレーベル、オウエン、モンテッソーリ、ピアジェ、エリクソンらの教育思想家たちは互いに影響しながら実践と研究によって幼児教育を発展させてきた。当時の欧米はキリスト教との関連が深く、思想家らには精神的なバックボーンとして「神のもとの人間の平等」や「隣人を愛すべきこと」「神を恐れ敬い、善行をなすこと」という信仰を持つ人が多かった。

日本では江戸時代には幼児は教育の対象とされておらず、幼稚園は存在しなかった。開国し近代国家建設へ向かうため国民皆学が目指され、小学校に遅れて幼稚園が設立されたが、幼児教育の黎明期にキリスト教宣教師によって多くの幼稚園が設立され、保育者の養成校も設立された。彼らはキリスト教のバックボーンをもつ欧米の教育思想を正しく日本に伝え、迫害されながらも日本の幼児教育の発展に大きく貢献した。

はじめに

2017年に幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針が改訂・告示された。今回の改定では、３法令が同時に改訂（改定）され、幼稚園、幼保連

キーワード：幼児教育，キリスト教保育，教育方法，教育課程
Key words: Early Childhood Education, Christian Childcare Education, Education Method, Curriculum

携型認定こども園と保育所が日本の大切な幼児教育施設として位置づけられた。これからは３法令の幼児教育現場への具体的な実践と応用が求められている。

現在の幼児教育に至る教育思想は、多くの優れた教育思想家が幼児のためにどのような教育方法が適しているかを研究し、互いに影響しあいながらより高みへと発展してきた。これまでの世界と日本の幼児教育はどのような道筋で発達し、現在の姿になったのだろうか。日本の幼児教育の歴史にキリスト教保育がどのような影響を与えたか、先行研究からひも解く。

１、世界の幼児教育方法の理論の歴史

日本の幼児教育の歴史を考えるとき、まず先行研究から世界の幼児教育の思想が誰によってどのように構築されたのか、どのような時代の思想背景があったのかを考えることが重要である。それぞれの研究は単独に構築されたものではなく、互いに影響し、学びあったり批判しあったりして発展してきた。特に幼児教育について研究した教育思想家の理論と相互関係をおおむね年代順に列挙する。

ヨハン・アモス・コメニウス（1592～1670）は1592年にチェコのモラヴィアで生まれた。「近代教育の父」と呼ばれ、「大教授学」つまり「あらゆる人にあらゆる事柄を教授する、普遍的な技法を提示する大教授学」を著した。また、世界最初の絵入り教科書である「世界図絵」を書き、興味深い絵により学習の動機付けを与えることにより絶大な人気を博し17～18世紀に多くの言語に翻訳された。コメニウスは約400年前にすでに現代の教育理論に通じる「子どもは一人ひとり発達と学習の進み具合が異なっているので、発達段階に即した教育実践が求められる。」と考え、先見の明を示した。

ジャン・ジャック・ルソー（1712～1778）はおもにフランスで活動し、教育論「エミール」を著した。この論文は「エミール」という架空の少年の幼年期、少年期、青年期、成人期、結婚という発達段階ごとの人生を記し、自分で考え、問題を解決し、理性的判断で行動できるようになることが大切だと論じている。子どもの社会化は必要だが、個性化を促進する幼児期の自然教育が先だと主張した。

ヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッチ（1746～1827）は、戦争孤児のための孤児院兼学校をスイスのシュタンスに開き教育を実践したり、イヴェルドンの学校で一緒に生活して生徒を指導したりして「生活が陶冶する」という原理を提唱した。イヴェルドンの学校は

教育の中心地と言われ、フレーベルやオウエンを含むヨーロッパ各地からの見学者が訪れた。「ゲルトルート児童教育法」「白鳥の歌」など多くの著作を残した。質の高い幼児教育は、すべての段階の教育モデルとなるべきだと著述した。

フリードリッヒ・フレーベル（1782～1852）はドイツで生まれ、イヴェルドンのペスタロッチの学園で教師をしながら学び、多くの教育実践を積み、「ドイツ学園」という名の教育施設を開設した。その後、特に幼児教育が重要性を持つと考え、1840年に子どもの園「キンダーガルデン」を開いた。教育遊具「恩物」を開発し、幼児教育の指導者を養成し「人間の教育」「母の歌と愛撫の歌」「幼稚園教育学」等を著した。

イギリスのロバート・オウエン（1771～1858）は、若くして経営者となり多くの人を雇用した。その工場の労働条件の改善に取り組み、労働者の子どもたちのために「性格形成新学院」を開設し、1816年に世界最初の保育施設「幼児学校（Infant school）」を置いた。オウエンまでの「学校」は暗記学習が中心でアメとムチによる強制教育だったが、オウエンは教員の体罰を禁止し子どもの好奇心を刺激して学習意欲を内面から引き出す方法を考案し「新学院」と名付けたのだ。人間は先天的に諸能力の素質を持って生まれるが、環境を通して諸能力を発展させるので、教育の役割は子どもの個性や発達段階に配慮し適切に環境を整えることにあると考えた。

マリア・モンテッソーリ（1870～1952）は、女性の立場が大変低い時代に、試練を乗り越えイタリア初の女性医師となった。その後、イタールやセガンにも学び、障害のある子どもに新しい教育方法を試して大きな成果を上げ特別支援学校の必要性を訴えたので、ローマに知的障害児の施設が設立された。またスラムの保育施設「子どもの家」で働き、多くの教材を開発し環境を整え、幼児が物事に一番興味を持つ月齢つまり「敏感期」に自ら教材で遊ぶときに素晴らしい成長を遂げることを実証した。この「モンテッソーリ・メソッド」は世界的に有名になり、モンテッソーリはアメリカ、ヨーロッパ各地、インドで講演や教師養成を行った。

ジャン・ピアジェ（1896～1980）はスイスに生まれ、ソルボンヌ大学で心理学を教え、同僚のセオドア・シモンのビネー・シモン知能検査について研究し、また子どもの各年齢の発達段階を科学的実験的手法で詳しく証明した。ピアジェの研究によって発達段階に不適切な教育行為が間違いであることが明らかにされ、保育や教育が科学的見地から補強された。ピアジェは「子どもは大人と違った考え方で考える」といったルソーの直感を科学的実験的手法で解明した。

エリク・エリクソン（1902～1994）はドイツで育ち、フロイトから精神分析を学び児童精神分析医となり、モンテッソーリ・メソッドを学んでモンテッソーリ教師となった。アメリカに渡り大学で教えながら「幼児期と社会」を著し、幼児の発達段階について心理社会的に提唱した[1)]。

これらが今回取り上げる幼児教育について研究した思想家である。欧米では産業革命の影響で保育に欠ける乳幼児数が増え、幼児教育施設の数はイギリスでは1835年に300園以上、フランスでは102園を数え、ドイツでは1840年に230園あった[2)]。また、幼児教育施設の増加とともに、実際に幼児教育を行いながら思想家の研究によって子どもの発達段階や幼児期の教育の大切さが教育的に解明され、保育者と思想家が交流し、実践と研究を繰り返しながら幼児教育が発展し、特権階級だけではなく全ての子どもの教育が大切だと言われ始めた。そもそも日本ではまだ幼児教育施設自体が存在しなかった時代の事である。

２、教育思想家とキリスト教との関係

欧米の幼児教育施設と思想家が発展した時代と地域はキリスト教との関連が深い。科学と神学は対立するのだろうか。今村（2001）は「近代科学成立期におけるキリスト教的な神概念に着目し、ケプラーとニュートンと神学の関わりについて論じ、近代科学が必ずしもキリスト教と対立するものではなく、むしろキリスト教こそが近代科学を生み出す母胎となったという解釈も成り立ちうる[3)]」ことを確認した。その観点から、教育思想家たちとキリスト教との関わりを述べる。

キリスト教は旧約聖書39巻と新約聖書27巻からなる聖書を正典とし、創造主が万物と人間を創造しすべての人は神の前に平等で大切であり、全ての人は罪人であるがキリストが人の罪を贖うため十字架上で死んだ事を信じることにより罪が赦されると説く[4)]。

コメニウスは、キリスト教のボヘミヤ同朋教団の手で育てられ、キリスト教の聖職者を目指した経験がある。

ルソーはエミールの中の「サヴォワの助任司祭の告白」で天体は一定の法則のもとで運行し、すべての物質物体は調和した秩序のもとに動くとすれば、そこに何らかの意志や英知が働くと、「自然宗教」として神をとらえた。

ペスタロッチは祖父が牧師で、教区内の貧しい人々の救済に尽力しているのを見て深く心を動かされ、神学の道に進んだ。「神は人間にとって最も身近な関係でいらっしゃる。

信仰は人間に最も必要なものであるが、教育で作り上げられた知恵の成果ではない。」と、身近な人の温かい配慮と世話を通し、目に見えない神の存在への確信を強めさせるといった経験主義的方法を主張した[5)]。

フレーベルは、牧師の息子であり、母方の祖父、曾祖父も牧師である。乳児期に実母を失う試練の中で聖書の言葉の意味を熟考し、賛美歌に支えられて成長した。「キリスト教に、つまりイエスの宗教に基づかない教育はどれもみな不十分であり、一面的である。」と述べ、礼拝を大切にし、父から学んだキリストの教えを心にとどめた[6)]。生活は万物が神によって統一されると考え、教育は神性が宿っている幼児に内在するものを引き出すと考えた[7)]。

オウエンは「自叙伝」８章で「すべての子どもたちが優良な性格を形成するために、社会は誕生時から優れた環境と方策を採用すべきである。そうすれば、誰でも子ども達を愛さずにはいられなくなるだろう。これこそ隣人を自分自身のように愛することを可能にする唯一無二の方法である。」と述べ、イエス・キリストがこれより大事な命令はないと新約聖書マルコ12：31で教えた「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。私は主である」旧約聖書レビ記19：18[8)]を引用している。

モンテッソーリは、キリスト教徒であり世界宗教友好協会で「子どもは創造主の最も明確な作品で、世界で最も力強い存在であるから、平和の道を求める際に子供たちを焦点に置かなければならない。」と講演した。子ども理解と研究のバックボーンにキリスト教信仰がある。

エリクソンの著作には「青年ルター」があり宗教改革の契機となったルターを精神分析学のアイデンティティという観点から明らかにしている。

ニーバーは、中世以来の聖書的な視点が影響して精神運動としてのルネサンスが人間の無限の可能性を肯定し個人の成就を再発見したことを報告した[9)]。

これらのように歴史上重要な教育思想家の多くはキリスト教とのかかわりが深いことがわかる。そのため、彼らの教育思想の根底には「神のもとの人間の平等」や「隣人を愛すべきこと」「神を恐れ敬い、善行をなすこと」が基本的にあることが推察される。これは次項に述べる日本における子どもの扱われ方とは大きく異なる思想であるといえる。

３、日本の幼児教育の歴史

日本では、江戸時代（1603～1868年）には上流階級の６～７歳以降の児童を対象とした

藩校・寺子屋・郷学・私塾は存在したものの、全国民を対象とした教育制度はなく、まして幼児教育の施設はほとんど存在せず、親が保育することができない幼児は家庭の中や、老人や姉によって子守りされていた[10)]。

そればかりか、庶民や農民の間では生活困窮がはなはだしかったため、全国各地でやむにやまれぬ選択として堕胎や間引きが行われた。しかし民俗信仰に基づいた「７歳までは神のうち」という考え方により幼児を神のように大切に扱うという側面があるものの乳児の間引きが合理化され、堕胎や間引きは現世からよみの国へ帰っていただく「モドス・カエス」として容認されていた。幕府や諸藩は租税の収入増加のため人口が減らないように「出生の子取り扱いの儀、御触書」を出し間引きを禁止したが、庶民や農民は生活基盤の脆弱さによって子育てをできない現状は変わらず、間引きは減らなかった[11)]。この習俗は地域によるがおおむね近代以降は行われなくなっていった[12)]。

明治維新および文明開化によって日本が近代国家建設へ向かおうとする中で、政府は教育制度の近代化を目指して1871年に文部省をおき1872年に「学制」を発布し、国民皆学を目指し始めた。これは画期的な事業であり、まず小学校の設置から着手された。1876年文部省によって日本初の幼稚園である東京女子師範学校付属幼稚園が開園した[13)]。それは東京女子師範学校ができたため学生が実習をする実習園が必要になり、幼児のためというよりはむしろ女子教育のために幼稚園が開設されたものである。この幼稚園は上流階級の子弟が馬車に乗り通園するといった庶民感覚から乖離したものであり、保育内容もまだ手探りで、唱歌・説話・遊戯もほとんど西欧のものだったため幼児になじみにくかった。ドイツでフレーベル幼児教育の理論を学んだ松野クララが教員として着任し、教育課程は「物品科」「美麗科」「知識科」の３科目であった。フレーベルの恩物が使われたが、机上での恩物操作にとどまり、本来のフレーベルの思想理念が十分に実現されたものではなかった[14)]。その後10年ほどは、保育者の養成制度や保育に関する書籍などが無かったため、幼稚園の普及は遅々として進まなかった。

明治初期の日本では、学制は発布されたものの小学校の充実は道半ばであり、学校の建設費や授業料まで地域住民の負担であった。そのため公費の支出は幼稚園より小学校の設置や義務教育年限の延長が優先され、「幼稚園は公立で税金を使って幼稚園教育を充実させるのではなく、民間の慈善、優しい心をもって発展するのが望ましい、また、施設・設備についても、門や庭、木さえあれば簡便な幼稚園を設けることができる」と軽く考えられていた。市町村立幼稚園の増加が抑えられ、私人宅や教会附設の小規模な私立幼稚園が

多数設立された鳥田（2012）[15] とあり、文部省としては幼稚園教育の充実の機運はまだだったが、日本の幼児教育の黎明期よりキリスト教会の貢献があった事がうかがえる。

1890～1900年代には小学校の就学率が上がり幼児教育にも関心が高まってきて、この時期に幼稚園は急速な進展を見せる。全国的な幼稚園普及に拍車をかけたのはキリスト教系幼稚園の存在が大きい。1887年で全国67園だった幼稚園は1897年には222園となり、公私立ともに普及していくと同時に、幼稚園関係者による保育研究団体が東京（フレーベル会1896年）と関西（京阪神連合保育会1897年）に生まれた。この団体は保育研究を進めるとともに、国に幼稚園の法的整備や保育者の待遇改善を求め、その結果1900年には文部省が初めて幼稚園の編成、組織、保育項目について規定する「幼稚園保育及び設備規定」が制定された。当時の保育項目は「遊嬉」「唱歌」「談話」「手技」であった。

４、幼児教育の歴史とキリスト教の関わり

日本において、キリスト教は長期間迫害を受け少数派であった。豊臣秀吉によって切支丹は弾圧され、26聖人処刑等のキリスト教弾圧の凄惨な歴史があり、欧米にもよく知られていた。265年の鎖国ののち開国してからも明治政府はキリスト教に対し非常に厳しい態度を取り旧幕府のキリシタン禁制の方針を継承して浦上信徒に対して迫害を加えたが、欧米諸国の抗議を受けて1873年「切支丹禁制」の高札を撤去して黙認した野々目（1979）[16]。その後も昭和の戦時体制の下で長く敵性宗教とされた。

しかし幕末からカトリックのシスターや神父・プロテスタントの宣教師らが生命の危険をかえりみずに来日し始め、生涯を日本の宣教・教育・福祉に献身的に捧げた。彼らは都会だけではなく、交通の不便な農村や山村、漁村に教会を立て、幼稚園・保育所・福祉施設を設立して、地域社会に尽くしたのである。

1868年にド・ロ神父はフランスから長崎県に来たが、過酷な迫害に会った。1873年に切支丹禁制が終わってから1877年に孤児のための浦上養育院、1883年に授産所の出津救助院を設立し、1885年に出津保育所を設立した[17]。

1872年にサン・モール修道会のメール・マチルドは４人の修道女と船に乗って神奈川県横浜に来て、孤児や低所得者の子どもの養育と教育に当たった。その後、その施設は菫女学校となり、1910年雙葉学園に小学校と幼稚園が設立された。初代校長はメール・テレーズでキリスト教主義の女子教育を日本に根付かせた。現在の校名は横浜雙葉学園となって

いる。

1880年には桜井ちかによる桜井女学校附属幼稚園や横浜のブリテン女学校附属幼稚園が設立された。

1884年にメリー・K・ヘッセルは石川県に北陸学院を創立し、1886年アメリカ人宣教師サイナ・ポートルによって英和幼稚園（現・北陸学院第一幼稚園）と英和小学校が創設された[18)]。北陸は仏教徒が多い地域でキリスト教への抵抗もあり、仏教幼稚園との競争となり大変な苦労をしたことが山森の資料からうかがえる[19)]。

1886年に兵庫県神戸市では神戸基督教会婦人会が幼稚園の設立を要望し、1887年アメリカからA・Lハウ教育宣教師が派遣された[20)]。ハウはシカゴ・フレーベル協会保母伝習所を卒業し９年間の園長の実務経験を持つ専門家で、熱心なキリスト者かつフレーベル教育の専門家であった。ハウは1889年頌栄保母伝習所を開き、1889年頌栄幼稚園を開園した。当時保育者を養成できる指導者が少なかったので、京阪神のみならず東京女子師範学校にも招かれ、保育の講義を行っている。箱根山をかごに乗って越えたという交通の不便な時代に各地へ出講したことから、ハウの保育者養成への熱意がうかがえる。それまでに開設された公立幼稚園は、フレーベルの考えを取り入れながらも彼の思想の神髄に迫るものではなかった。なぜなら近代化に伴う教育改革の一環として進められたにすぎず、そこに宗教的な要素は必要なかったからである。しかしハウによって本来のキリスト教の考え方が根底に流れるフレーベルの思いを尊重した保育が日本で始まったと言える。ハウは、保育者の専門性の向上と保育実践の援助のために、1894年「保育学初歩」「母の遊戯及育児歌」1895年「フレーベル氏人之教育」1909年等10数冊の著作を著した。ハウはフレーベルの元著の絵画を当時の日本の風俗に適するように日本風に描きなおさせ、詩は七五調の長歌風にして理解しやすく出版した。ハウは1906年に欧米の婦人宣教師･婦人教師らとジャパン・キンダーガルデン・ユニオン（JKU）を結成し、幼児教育・保育の質の向上を日本の各地に根付かせていった。JKUは毎夏軽井沢で報告・研修会を行い、その結果は1907年から年報として残され貴重な資料となっている[21)]。JKUは1907年にはアメリカに本部を設ける「万国幼稚園連盟（The International Kindergarten Union）」にも加入を認められ年報を送付していたため、日本人には知られなかったが、日本の保育事情の一端を世界に発信していた。JKUの研修会によって世界の最先端の保育動向や保育実践の新知識が日本に持ち込まれていた[22)]。日本がファシズムに傾くにつれキリスト教は敵性宗教とされたためJKUは解散し、1939年に日本人団体のキリスト教保育連盟に引き継がれた。

1890年大阪府では小橋勝之助が「博愛社の孤児実業的教育は、神の啓示なる聖書により定む。」と、児童養護施設の博愛社を設立し、1969年には幼稚園を開園した。第二次世界大戦が終戦に至るまでの国家神道、全体主義、軍国主義の体制の下での艱難辛苦の日々を「隣人愛」をキーワードとして歩んできた[23)]。

1900年、東京都の華族学校幼稚園の教諭野口幽香と森島峰が貧しい家庭の子どもたちのためにキリスト教保育を行う私立二葉幼稚園を麹町に設立。徳永恕が中心となり、その後1916年に二葉保育園に改名。地域の貧困に苦しむ人々に尽くした。

また、賀川豊彦は、労働運動、生活協同組合、農民運動、平和運動、キリスト教保育を行った。その後神戸市、大阪市、京都府和歌山県、東京都など全国各地に幼稚園と保育所を設立した。自然を通して神の存在を幼児に知らせるという幼児自然教案を提唱し、キリスト教保育連盟で活発に活動した。

キリスト教幼稚園はその後着実に増加し、1910年には60園近くが全国各地に存在していた[24)]。年代が違うので概算であるが、日本全体の幼稚園が1897年に222園であったことを考えると、当時その３割近くがキリスト教幼稚園であったことが推察される。

太平洋戦争（1941. 12～1945. 8）に入る数年前からキリスト教幼稚園も他のキリスト教団体と同じく思想的監視の一環に置かれた。園によっては保育室の中にまで憲兵が入ってきたという。戦争中はキリスト教幼稚園も閉園、休園、戦時託児所への変更が行われた。しかし戦後は幼稚園・保育所ともに増加し、現在日本におけるキリスト教系の保育園及び幼稚園は1500園を優に超える[25)]。現在日本の幼稚園は10878園[26)]、保育所は27137園であり[27)]、合計38015園で、約４％程度の園がキリスト教系と言うことができる。

５、現在のキリスト教保育

PRC（Pew Research Center）によると2010年の日本のキリスト教徒の宗教別人口割合は1.6％であり、日本の仏教徒の36.2％に比べるとマイノリティである。また、JGSS（日本版総合的社会調査）の日本における宗教・宗派別分布ではキリスト教の割合は1.0％である。WCD（World Christian Database）による世界人口の主要宗教別分布の推計からは、キリスト教の割合が1800年～2012年の間、22.7～33.0％を推移しており、世界のキリスト教割合と比較しても日本のキリスト教割合は顕著に少ない[28)]。

しかしジャパン・キンダーガルデン・ユニオンに源を発するキリスト教保育は、西欧で

発展した幼児の教育方法を伝達された日本人保育者に現在も脈々と受け継がれている。キリスト教の人間理解・子ども理解に基づいて保育が行われている。キリスト教保育連盟の「新キリスト教保育指針」では、キリスト教保育を次のように定義している。

「子ども一人ひとりが神によっていのちを与えられたものとして、イエス・キリストを通して示される神の愛と恵みのもとで育てられ、今の時を喜びと感謝をもって生き、そのことによって生涯にわたる生き方の基礎を培い、共に生きる社会と世界をつくる自律的な人間として育つために、保育者が、イエス・キリストとの交わりに支えられて共に行う意図的、継続的、反省的な働きである[29)]。」

６、総合考察

日本において幼児教育がまだ研究はもちろん存在さえしていなかった黎明期に、キリスト者によって幼児教育が導入され、先んじて発達し研究された欧米の教育思想と教育方法が伝えられた。欧米の教育思想の多くはキリスト教のバックボーンを持っており、キリスト者によって教育思想の神髄を伝えることが最適だったと思われる。また、教育の対象は幼児のみにとどまらずまだ日本に数少なかった保育者にも向けられ、1800年代から次々とキリスト教系の保育者養成学校や大学が設立され、保育者養成にも大きな功績があった。JKUによって、毎年研究発表が行われ、欧米での最先端の教育方法を学ぶことができ、保育領域や教育課程などの研究がなされていた。

現在も日本のキリスト教割合は少ないが、キリスト教の教える「すべての人は神の前に平等で大切である。」ことや、「自分と同じように他の人を愛する。」といった考え方は、幼稚園教育要領の「幼児期に育ってほしい姿」の協同性や社会生活とのかかわりにもつながる、時代が代わっても色あせない普遍的な概念である。

日本がキリスト教国であった、あるいはキリスト教に好意的で寛容な国であったならともかく、度重なる迫害の歴史があったにもかかわらず欧米から多くのキリスト者が派遣され、幼児教育と保育の教育方法の質的向上に多大な貢献があった事と、その信仰を受け継いだ、日本人キリスト者が我が国に社会貢献を行ってきた歴史は、特筆に値すると思われる。

今後の研究課題は、大きく変わりつつある日本社会の今後の幼児教育と、新しい幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針をキリスト教保育の視点から読み解き、より実りある保育実践に資することである。

後注

１）吉田貴子・水田聖一・生田貞子編『保育の原理』pp. 156-182
２）諏訪義英『日本の幼児教育思想と倉橋惣三』p. 16
３）今村一成『深層心理学誕生に至るヨーロッパ精神史の一側面に関する考察』pp. 223-234
４）『聖書』ローマ人への手紙３：23～24、p. 293
５）長尾十三二、福田弘『ペスタロッチ』p. 62
６）小笠原道雄『フレーベル』p. 137
７）前掲書２．p. 31
８）前掲書４．レビ記19：18．P. 205
９）佐久間重『キリスト教神学における歴史認識―ラインハルト・ニーバーによる近代文化についての見解』p. 55
10）前掲書２．p. 49
11）豊島よし江『江戸時代後期の堕胎・間引きについての実情と子ども観（生命観）』pp. 77-86
12）松崎憲三『堕胎（中絶）間引きに見る生命観と倫理観』p. 126
13）前掲書２．p. 80
14）前掲書１．p. 187
15）鳥田直哉『幼稚國における「公学費」および「公学二属スル収入」の分析』pp. 43-61
16）野々目晃三『明治（前・中）期におけるキリスト教学校設立と発展』pp. 69-99
17）倉戸直美・渡辺のゆり・児玉衣子・伊藤美佳・荒内直子『キリスト教保育』p. 223
18）前掲書11．p. 230
19）山森泉・児玉衣子『北陸地方のキリスト教保育史―JKU年報からの翻訳と解説(4)』pp. 79-104
20）頌栄短期大学ウェブサイト
21）児玉衣子『聞き書き北陸地方のキリスト教保育史－JKU年報から(2)－』pp. 1-12
22）児玉衣子『聞き書き石川県のキリスト教保育を担った人々(1)JKU年報１－５号に見る北陸地方の記録』pp. 1-20
23）前掲書11．p. 20-21
24）前掲書11．p. 37
25）前掲書11．p. 38-39
26）文部科学省，学校基本調査H29
27）厚生労働省社会福祉施設等調査2018年
28）早瀬保子・小島宏『世界の宗教と人口』pp. 11-18
29）キリスト教保育連盟ウェブサイト

参考文献

今村一成『深層心理学誕生に至るヨーロッパ精神史の一側面に関する考察』大阪大学教育学年報、６、2001.
小笠原道雄『フレーベル』清水書院 2000. 8.
キリスト教保育連盟ウェブサイト https://www.kihoren.com/about.html　2018. 11. 8閲覧.
倉戸直美・渡辺のゆり・児玉衣子・伊藤美佳・荒内直子『キリスト教保育』聖公会出版 2007. 9.
児玉衣子『聞き書き北陸地方のキリスト教保育史－JKU年報から(2)－』北陸学園短期大学紀要 2003. 6.
児玉衣子『聞き書き石川県のキリスト教保育を担った人々(1)JKU年報１－５号に見る北陸地方の記録』北陸

学園短期大学紀要 2002. 6.
佐久間重『キリスト教神学における歴史認識―ラインハルト・ニーバーによる近代文化についての見解』名古屋文理大学紀要 2010. 3.
鳥田直哉『幼稚國における「公学費」および「公学二属スル収入」の分析』東海学園研究紀要 2012. 3.
頌栄短期大学ウェブサイトhttp://www.glory-shoei.ac.jp/tandai/about/history/　2018. 11. 8閲覧.
諏訪義英『日本の幼児教育思想と倉橋惣三』新読書社 2007. 6.
『聖書』（新改訳）いのちのことば社 1970. 9.
豊島よし江『江戸時代後期の堕胎・間引きについての実情と子ども観（生命観）』了徳寺大学研究紀要 2016. 4.
長尾十三二・福田弘『ペスタロッチ』清水出版 1991. 11.
野々目晃三『明治（前・中）期におけるキリスト教学校設立と発展』桃山学院大学キリスト教論集、1979.3.
早瀬保子・小島宏『世界の宗教と人口』原書房 2013. 7.
松崎憲三『堕胎（中絶）間引きに見る生命観と倫理観』日本常民文化紀要、2000. 3.
文部科学省，学校基本調査H29，Ⅱ 調査結果の概要［学校調査，学校通信教育調査（高等学校）］2018年.
山森泉･児玉衣子『北陸地方のキリスト教保育史―JKU年報からの翻訳と解説(4)』北陸学園短期大学研究紀要、2007. 6.
吉田貴子・水田聖一・生田貞子編『保育の原理』福村出版 2018. 2.